

郷土室だより

切絵図考証 四

安藤 菊二

浜町一丁目(続)

○坪井信道

前回記すべくして、紙面のつこうで載せず
にしまった人物に、「坪井信道」がある。字



安政六年夏改、尾張屋版切絵図(部分)

田川榛齋の門下の逸材で、蘭学者としてその
名一世に高く、その門下から、箕作阮甫、杉
田成卿、緒方洪庵、青木周弼、黒川良庵、広
瀬元恭の諸名家を輩出した。富士川游博士の
『日本医学史』所引の、仮名交り文に直した
『墓誌』をここに掲げる。

坪井誠軒、名は道、字は信道、誠軒と号
す。美濃池田の人、父を信之と曰ふ。四子
あり。誠軒は季子なり。幼にして孤、伯兄
これに学を勧む。初め尾張秦滄浪に就き、
又江戸、倉成竜渚に就て学ぶ、後又江戸に

○県居旧居

坪井信道旧居の地は、『御府内沿革
図書』によって『明和八年卯年の形』
まで遡ると、「細田民之丞」の居宅に
なる。甚だ興味深いことに、この細田
氏の邸地は、宝暦の頃、賀茂真測が、
その邸地の一部百坪を借りて、書齋「
県居」を営んだ所だったのである。
山伏井戸の真測の旧址については、
戸川残花氏が「県居考」に引かれた、
真測の掛取魚彦宛の手紙に
然ば弥々山伏井戸の中通にて、細田
主水の地を百坪かり申管に定候間、

来たり、道引を以て口を糊し、宇田
川榛齋の門に入り、西洋医学を受
く。榛齋其篤学を賞し、之を塾中に
置き、資するに衣食を以てす、是に
於て力を学業を専にすることを得、
幾もなくして儕輩を凌駕するに至
る。乃ち業を深川に開き、業を受け
治を乞ふもの群集す。萩侯其名を聞
き、聘して侍医となし、累に俸を加
へて三百石に至る。業を受くるもの
前後数百人、同時江戸に伊東玄朴、
戸塚静海あり、誠軒を併せて三大蘭
方家の称あり、嘉永元年十一月歿
す。年五十四、浅草誓願寺に葬む
る。配青地氏、三男三女を生む。
(下略)

普請に取かゝり可申候。

といっていることや、高柳光寿氏が、国学院雑誌に寄せられた「県居について」という論文に紹介された、真洩が妻子梅谷真滋に与えた手紙に

家作之事、浜町にて本矢倉といふ所の(山伏井戸ともいふ)細田主水といふ御扨従組之御旗本之地を百坪借候て、先日以来普請致候。右は最前細田丹後守とて御勘定頭之名有人之子にて今は五百石也。家は皆もとの家を引うつし、少々づゝおくの居間を作りたし申候。土蔵共に三十両少し余にてわたくしにいたし候。大工実体ものにて能いたし、大慶いたし候。(下略)

と報じているので明らかである。

しからば、その旧址は現在のどの辺に当るであろうか。この点に関して、いろいろの人が調査を試みている。そうした調査の経過は、小山正氏の『賀茂真洩伝』(昭和十三年、春秋社刊)に詳しく述べてある。氏は言う。

残花氏は、その結論に於て「以上を綜合すれば県居は浜町の細田邸の一部にして、後に秋山邸となり、明治の道路改正の後は日本橋区浜町七、八、九の番地中に当ると雖も其址は知る可らず。」と述べられている。残花氏がこの結論に達するまでには

随分苦心せられてゐる。即ち、明治四十四年の初夏に、江戸名所図会の「加茂真洩翁閑地、浜町にあり」と云ふ手がかりとして、日本橋区長仁杉英氏及び浜町一丁目大沢南岳氏と云ふ幕府頃は共に与力の家でありその土地に縁故の深い方を案内として、実地に就いて調べたが判明しなかつた。

その後、氏は真洩の郷国、遠州の史家後藤爾堂氏と談じ、真洩同族の後裔岡部謙氏の報を得、口碑に残る山伏井戸を頼りとして、数種の江戸地図を見て、山伏井戸の所在地は久松町三十五番地の辺であることだけは確かめ得、更に市史編纂掛に就いて御役所拈(府内沿革図書)を見ると、細田源三郎の名があり、更に本図書に依つて調べると、次のやうな沿革が明かとなつた。

秋山氏邸(宝暦頃より)細田氏邸(文化頃より明治)秋山氏邸(明治三年八月)塚本某

県居旧跡の調査は、既に明治の初年に有志者に依て心掛けられて居る。もと北島町に住居し、加藤枝直の近くにいた、町方与力の家であつたと云はれる豊田長敦氏などはその人である。氏は福羽殿の意を受けられて二ヶ年越調査して、



賀茂真洩像 (賀茂真杜氏蔵)

いくらの年月ならぬど、浜町とばかりにて知られずなれば、去年よりにかけていたく尋ねわびたり

ここなりと今はさだかに知られざり月きよかりし其県居は

と歎詠するに至つたと云ふ。この豊田長敦氏は、明治四年九月の頃に八丁堀北島町七五番地(領、司法省使部豊田勝一郎祖父であると云ふことであるから、年代も可なり近かつたのであるが、既に判然し得なかつたのである。(下略) (昭和十二年九月十九日記す)

○「県居旧居は、関東大震災前に、東京府の史蹟係で史蹟指定をし、標識を立てたが、そのあたりは、震災後の土地区画整理で大変化をきたし、旧時の街並を模索することがきわめてむずかしくなつた。数年前、豊島寛彰氏が、『隅田川とその兩岸』中巻を著作する際にその地を調査し、次のように記述された。

「その場所は日本橋久松町一丁目二十五番地の道路上に當つていて、今は喧噪の地と化し、真夜中にもダンブカーが地響をたててつっ走つてい

る。東京都の史跡に指定されていたので、これを調査したことがあったが、その地点がはっきりつかめなかった。関東震災前に標識を建てた地点を探すのに、筆者は足を十数度ここに運んで、やっとその地点を確認することができた。金座通りの名称で呼ばれる明治座前の道路と、都電人形町停留所からの大通りとの交差点点上にある。「云々。」(同書一〇四一頁)

豊島氏は、泉居旧居の標識が、「久松町一丁目二十五番地の道路上にあった」という。しかし、真淵の旧址は、戸川残花翁が指摘されたように「浜町一丁目七・八・九番地辺」というのが正確のようである。このことは、日本橋区役所で刊行した「御府内往還沿革図書、日本橋之図」の、大正四年の地図と沿革図との対比によって、ほとんど疑いを容れない。その地の現在地番は、東洋経済新報社刊『にほんばし』の付図によると、地番改正後の、浜町一丁目一番地21・20・19号地と、街路を含めて、向い側の四番地15・3・5号地にかけた一区画の土地が、その場所に当るようである。地点を慎重に再検討の上、新たに旧跡の標識を立てるように切望する。

第6 浜町二丁目

旧時の浜町二丁目は、本号一頁に載せた切絵図の「山伏井戸」の通りの南、塙主諦・石坂宗貞等の小屋敷と、牧野(遠江守)・小笠原・稲葉・牧野(越中守)・津軽・水野・細川の諸侯と松平相模守の邸地のあった所で、明治五年、浜町二丁目となった。この地区の大名屋敷は、大川から浜町川にかけて東西に長く、南北の幅はきわめて狭い、俗にいう鰻の寝床さながらの地割りで、ずいぶん使用しづらい邸だっただろうと思われる。各邸地の主人公の変遷を述べるのは煩わしいから、眼前の邸地について、気づいた事どもを記そう。

○牧野遠江守

信州小諸、一万五千石の城主。当主は康済。元矢ノ倉の中屋敷は、安政五年に拝領した。『藩邸沿革』に、
一、中屋敷 元矢ノ倉
相對替安政五年十二月廿日坪数三千九百四拾九坪
相對屋敷書抜、安政五年十二月廿日佐竹彦岐守中屋敷、元矢ノ倉三千九百四拾九坪牧野遠江守え、同人下屋敷、浜町河岸四百坪之内三百坪齋藤辰吉え、六方相對替(若年寄就任ニ

付新設)

と見え、『例藩要鑑』に、
小諸藩(信州小諸)
牧野遠江守康済 一万五千石
長岡藩の支封たり。宗家第二世忠成の次子康成、与板一万石を分受して別に家を立つ。元禄一五年孫康重五千石を加賜され、信州小諸城に移治す。爾後九世、子孫世襲し、康済に至って維新となる。明治二年六月小諸藩知事に任ぜらる。」

○塙主諦

『天保九年武鑑』に「小石川養生所御医師」。『文久二年武鑑』に「表御番医師、御番料百表、山ふし井戸」とある。

○石坂宗貞

浜田義一郎氏所蔵の嘉永六年版、近吾堂版切絵図(この図については、別に稿を改めて記したいと思っている)には、「石坂宗哲」の名が刻されている。宗哲は鍼科の奥医師で、『安政六年武鑑』に「石坂宗哲法眼、百表廿人フチ、山ふし井戸」と見える。宗貞は宗哲と血縁の人、おそらくは親子ではあるまいか。

鯖江侯の儒者、大郷信斎の『統道聴塗説』第三編下に、「文政十二年三月

廿一日の大火記録」を載せ、「類焼御医師」の住所氏名を記して、

築地桂川甫賢 八丁堀栗崎道 同石坂宗哲 同同宗貞 浜町木村玄長 同同長安 八町堀太田玄 同遊佐東庵 同奥詰医師

浜町吉田快庵 同吉田浄庵 白銀町坂後庵 築地丹羽孝徹 両半井策庵 (下略)

と列挙している。しからば、石坂宗哲・宗貞父子?は、文政の頃、八丁堀にあって類焼し、後その居を浜町に移したのである。

○小笠原弥八郎

名は長儀。『安政二年武鑑』に、御小善請支配、四千五百石。『文久二年武鑑』には「中奥御小性、四千五百石」となっている。

○牧野越中守

この邸地は、『御府内沿革図書』によると、貞享以前は内藤志摩守の屋敷、貞享年中の頃は「牧野備後守」、享保年中以後幕末までは引続き牧野越中守と記されている。牧野越中守は、常州茨城郡笠間の城主であった。『列藩要鑑』に、

牧野越中守貞利 八万石
牧野氏は越中守成儀を以て祖と為す

元和五年新に五百石を賜りて小姓と為す。寛永十八年五百石を加賜され慶安元年四千石を加封して館林宰相の近習となる。万治三年三千石を長子に、二千石を次子に譲る。寛文十年成貞三千石を加封して館林宰相の伝相となり、叙爵して備後守と通称す。後加封相次ぎ、移治転封し、延享四年貞通八万石を以て常州笠間に転ず。爾後八世子孫世襲して貞利に至り維新となる。明治元年十二月貞利致仕し、子貞邦嗣ぐ。二年六月笠間藩知事に任ぜらる。

とあり、成儀の後、成貞・成春・成央・貞通・忠敬・貞長・貞喜・貞幹・貞一・貞利と承け、貞利の代に維新に際会した。福井久蔵博士著『諸大名の学術と文芸の研究』に、笠間牧野貞喜侯は、平林鴻山につき、後、文徵明を学んで書を善くされたとある。

同書には誌されておらぬが、貞喜の嗣貞幹は、本草学に興味を有していたらしい。東大前の井上書店の目録、昭和九年五月号に、「笠間文庫印」ありと注して

琉球草木写生 彩色筆写 廿五枚
写生遺編 三編四冊 牧野貞幹画
の書目を掲げている。

話は前に戻るが、貞幹の父貞喜は浜町の別業を「秋光園」と称していた。

寛政五年から八年頃にかけての句を集めた、惣直庵亀文の句帳の中に、その「秋光園の記」がある。

すみだ川の流、大川両国とふたつの橋の西北にあたりて、はま町てふ所あり。そとの御館の桜、海面より出る月のたゞちにさし入によりて、秋光園といふあり。四方あかりさうしにして、筆硯を友とせるには、秋毫の先も明うけし。先見おろす葦前栽千草万木植なし給へば、四季をりをりの花絶る時なし。庭籠には、もろこし蜜国の鳥栖て、聞しらぬ音を囀り、又家ほと・山鳩・高麗ぼとなど幾百となくつどひて、梢に登り檐に啄む。中には白き鳥の嘴と足と赤き是なむ都鳥とかと疑ふ。初は纒計銅つけ給ひしが、卵産み難広がり、歳々年々かく殖けるとぞ。或時は己がまゝに遠く飛行、いづこともなく友鳥いざなひ来りて、それも爰をすみ所となせり。かく睦じきは、もとより孝ある鳥にて、三枝の礼もて育ちぬれば、友にも其礼及ぼす成べし。されば此ものゝ殖え栄るは、豈愛たきためしならずや。

向に柳さくらを植わたしたるは、うま場なれば、冴わたる響の音、胡馬のいばゆるは北風を慕ふなるべし。かたはらの板屋に勇しき声懸かはし

ひしひしてふてふと鳴る音は、つはものゝ道を学び習はし給ふ所とぞ。

こは内に文を守り、外に武を備へ給ふなる御家の風いとたふとし。少し放れて、物ふりたる木立、はた大なる柳のみゆるは、誰殿かれ殿のやしき、高き麗は深川の霊岸、築地の御堂など算へつゝ、一むらの森のひまより、品川の海づらほのかに見えて帆橋立並ぶは、もろ国より入つどふ武江の繁栄いふも更也。頭をめぐらせば、するがなる富士の高ね兀として出つ。其夕榮に輝き映ずるは、金城の御櫓、青天にそびえて千代万代のためしといも尊く、此かたばかりにもうしろにせぬ所也なり。こなたにきねが鼓の音するは神田湯島の神社、鐘は上野かあさ草かと、聞たびに翁の吟詠思ひ出らる。北のさうじを開けば、少しき高き所あり。夫より一層楼に登れば、近くは億兆の家、貝をふせ伏せたらむごとく、遠くは木立黒みわたり、間間に里あり川あり田面あり、芦辺にやあらむ、田鶴啼わたり驚からず飛かふ。げに仙境もかくやと命をのぼるこことぞせらる。ふりさけ見れば、つくば山翠碧にして、女男とふたつ立は、双剣の峯とたぐへしも宜なるかな。此山を見るく、つら／＼かうがへ

はべれば、しろしめす笠間の御城は右のかたなるべく、桜川はかしのほとり、雲居禪師の昔、平四郎が真壁の里は、此かたならむなどおし量りゆびさす。さあれば此一層楼は三十里を隔たる御するよしの処を遠望なし給へば、こなたよりはかしのこの国人をいつくしみおほしやり、かしくよりはこなたを尊み仰ぐ成べし。中にも筑波山は、かけまくもかしこくも日本武の尊、新まりつくばを過てとの給ひけるに、夜にはこゝのよとつけたまひてより、日の本の連歌の父はゝとなれば、連歌を筑波の道ともいふとなむ。さるに今俳諧を好ませ給ふに、つくば山の半を御知るよしにもせ給ふは、いとまかしこくふしぎなるさちとまうして筆ををさむ。

よつの時ときはに遠し遠筑波
惣直庵亀文

◇ 東京を語る会 第21回

日時 六月二十五日(土)

午後二時—三時三十分

演題 京橋・日本橋思い出話

講師 藤浦 富太郎氏 一その二—

(東京中央青果会長)